

アートは楽しい10
天国で地獄

Art is Fun 10: Angelic, Devilish, or Both
Hara Museum ARC

ハラミュージアムアーク

牛島 達治

Tatsuji Ushijima



スキマから見えてくるもの

いそがしく過ぎて行く日常の中で、ふと時間の軸が欠落したかのようなすきまに入り込んでしまっている自分に気づくことがある。このようなすきまに入り込むことにより、自分をとりまいている間近な現実から離れて、もっと全体を俯瞰するような視点であらためて純粋に現実を見なおすことが出来るような気がする。そして、このことは、私の生活の中で、とても大切なひとときであり、混沌とした日常をもう一度捉えなおすためには必要なことだと思う。これは、形もなければ言葉で形容するの難しいと思ふ反面、このような無駄に思われる瞬間は、おそろく誰にでもあると思う。しかし、日常の中では、事物の流れの中に消れ込んでしまっても不思議はない。

私は、自らの表現のために装置（作品）を創る。それは、物を媒介とした表現ではあるが、表層としての造形的なことよりも、概念的、哲学的な部分をどう展開して行くかということが重要性を感じている。また、解答を提示するのではなく、問いを生むことができる表現をめざす。

牛島 達治

1958 東京都生まれ
1994 A.C.C.(Asian Cultural Council)の助成によりニューヨークに滞在

個展

- 1984 「巴風展」神奈川県立現代美術館、ギャラリー
- 1987 「無用な機械たち」ヒルサイドギャラリー/東京
- 1989 「中野田・宇田直樹展」ヒルサイドギャラリー/東京
- 1991 「HOMAGE TO THE MOON」アートフォーラム宮中/東京
- 1992 「カハコ」の巻」ヒルサイドギャラリー/東京
- 1993 「ニュー自展名<風>座<<無用な機械たち>>から<<シジフォスの夢>>へ」目黒区美術館/東京
- 1995 「藍色もつひとつの塔」プラスマイナスギャラリー/東京
- 1997 「あすはなキウリたちの平野」中央美術アートギャラリーC・スエグ/豊田
- 1998 「水にまつわる理もれた記憶から」ZEXEL ART SPACE ZOOM/東京

グループ展

- 1982 「ZONE」東邦生命ギャラリー/東京
- 1983 「Bせ三展」横浜市民ギャラリー/神奈川県
- 「デザインフォーラム'83」銀座松屋/東京
- 「テーブル・椅子・コップ展」Gアートギャラリー/東京
- 「ニューヨーク・アート展」渋谷区立三軒茶屋/東京
- 1985 「第17回現代日本美術展」東京都美術館、京都市美術館
- 「現代美術の祭典'85」埼玉国立近代美術館
- 1986 「FROM SOUND」ストライプハウス美術館/東京
- 1988 「サウンドガーデンPART1」ヒルサイドギャラリー/東京
- 1989 「ドローイング展」ヒルサイドギャラリー/東京
- 「音のある美術館」松本県立美術館
- 1990 「サウンドガーデンII」ストライプハウス美術館、ハイネケンビレッジ/東京
- 1991 「ドローイング展」ヒルサイドギャラリー/東京
- 「Sonic Perception 音とその知覚に関する展覧会」川崎市市民ミュージアム/神奈川県
- 「サウンドガーデンIII」ストライプハウス美術館/東京
- 1992 「風」の造形展」すみだリバーサイドビル、ギャラリー/東京
- 「ドローイング展」ヒルサイドギャラリー/東京
- 「第1回国際コンテンポラリーアートフェア」(NICAF YOKOHAMA) /パシフィコ横浜/神奈川県
- 1993 「第3回名古屋国際ビエンナーレ ARTEC '93」名古屋美術館/愛知
- 「Kid's Art Land」直轄コンテンポラリーアートミュージアム/香川
- 1994 「平成展 第10回国際展 キヤンパル・アート・フェア」山崎国立美術館
- 「第3回国際コンテンポラリーアートフェア」(NICAF YOKOHAMA) /パシフィコ横浜/神奈川県
- 「ドローイング展」ヒルサイドギャラリー/東京
- 1996 「DREAM OF EXISTENCE - Exhibition of Young Japanese Artists」キエシエリ美術館/パダスタ
- 1997 「表出する大地」広島市現代美術館
- 「体感する美術'97 まちへ出ようー風と音と人の声」在倉市立美術館/千葉

What Comes into View through a Gap

I noticed something the last time, during the busyness of my day-to-day life, that I fell off the axis of time into a gap. Whenever that happens, I become distanced from the realities that normally surround me. I become able to see the same realities again with unselfish vision, fully, and with a wide perspective. Such moments are very important in my life; they are what I need to gain a renewed understanding of my chaotic life. I believe all people have such moments, though they be difficult to describe in words or form, and are of no apparent productive value. And I can imagine how such moments fly by, disappearing again into the flow of everyday events.

I create devices (artwork) by which I express myself. I use physical material as a medium of expression; I believe, however, that the development of the conceptual, philosophical component is more important than the formal aspects of the surface. I strive after expression that can inspire questions rather than give answers.

Tatsuji Ushijima

1958 Born in Tokyo
1994 Received a grant fellowship from the Asian Cultural Council to research contemporary American art

Solo Exhibitions

- 1984 "Self-improvement" Kanagawa Prefectural Gallery
- 1987 "The Machines without purpose" Hillside Gallery, Tokyo
- 1989 "Plan for the Nakanishi Space Park" Hillside Gallery, Tokyo
- 1991 "HOMAGE TO THE MOON" Art Forum Yamako, Tokyo
- 1992 "Structure of atmosphere" Hillside Gallery, Tokyo
- 1993 "New Meguro Meigaze; New Art Paradise from <The Machines without purpose> to <Sisyphus's Dream>" Meguro Museum of Art, Tokyo
- 1995 "Vista - Another Perspective" Plus Minus Gallery, Tokyo
- 1997 "The Afternoon of Straight Cucumber" C. SQUARE, Aichi
- 1998 "From the buried memory regarding the water" ZEXEL ART SPACE ZOOM, Tokyo

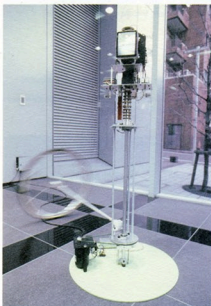
Group Exhibitions

- 1982 "Zone" Toho Seimei Gallery, Tokyo
- 1983 "De-Sem Exhibition" Yokohama City Gallery, Kanagawa
- "Design Forum '83" Ginza Matsuya, Tokyo
- "Table, Chair, Cup" Exhibition "G-Art Gallery, Tokyo
- "New York Art Exhibition" Sbiya Sebu, Tokyo
- 1985 "The 17th Japanese Contemporary Art Exhibition" Tokyo Metropolitan Art Museum, Kyoto Municipal Museum
- "Contemporary Art Festival '85" The Museum of Modern Art, Saitama
- "From Sound" Striped House Museum, Tokyo
- "Sound Garden I" Striped House Museum, Tokyo
- 1989 "Drawing Warehouse Exhibition" Hillside Gallery, Tokyo
- "Moment Sonorous" Tochi Prefectural Museum of Fine Arts
- 1990 "Sound Garden II" Striped House Museum, Heineken Village, Tokyo
- 1991 "Drawing Warehouse Exhibition Part 2" Hillside Gallery, Tokyo
- "Sonic Perception" Kawasaki City Museum, Kanagawa
- "Sound Garden III" Striped House Museum, Tokyo
- "The Wind's Molding" Sumida Riverside Hall Gallery, Tokyo
- 1992 "Drawing Warehouse Exhibition Part 3" Hillside Gallery, Tokyo
- "1st International Contemporary Art Fair, Japan (NICAF Yokohama)" Pacifico Yokohama, Kanagawa
- 1993 "The 3rd International Biennale in Nagoya ARTEC '93" Nagoya City Museum, Aichi
- "Kid's Art Land" Benesse House Naoshima Contemporary Art Museum, Kagawa
- "Kofu Exhibition" The 10th Memorial Exhibition - Kinetic Sculpture" Yamaguchi Prefectural Museum of Art
- "3rd International Contemporary Art Fair, Japan (NICAF Yokohama)" Pacifico Yokohama, Kanagawa
- "Drawing Exhibition" Hillside Gallery, Tokyo
- "Emits Light, Moves, Makes Noise" Non-Static Art in the 20th Century" The Museum of Modern Art, Wakayama
- 1996 "IZUMI WAKU Project 1996" Izumi Public Lower Secondary School, Tokyo
- "DREAM OF EXISTENCE - Exhibition of Young Japanese Artists" Kiscelli Museum, Budapest
- 1997 "Aspects of Land and Soil" Hiroshima City Museum of Contemporary Art
- "The fine arts which has a feeling of the body '97" Let's go to the town - Wind and Energy Spirit's and Person's Voice", Sakura City Museum of Art, Chiba



「水にまつわる埋もれた記憶から」(全景)
1998年

From the buried memory regarding the water
(installation view)
1998



「水にまつわる埋もれた記憶から」(回転体)
1998年

From the buried memory regarding the water
(rotating objects)
1998

「記憶—風景」(全景)
1996年

Memory - Landscape (installation view)
1996



天国で地獄

三井 知行

ハラミュージアム アーク 学芸員

今年で10回目を迎える「アートは楽しい」シリーズはいわゆる教育普及³¹を目的とした展覧会といえる。また同時に、日本人/日本を主な活動地とする若手・中堅と呼ばれるキャリアの作家を中心に、(5回目を以降)何らかのテーマ(タイトル)を持って企画されたグループ展でもある。

ハラミュージアム アークが開館当初より教育普及を目的とした展覧会を企画してきたのは、いうまでもなくその立地条件と関係がある。伊香保温泉近くの観光牧場に隣接したアークの来館者には、普段は美術にほとんど興味を示さない人も珍しくはなく、むしろ「現代美術」を見にくる人の数が少ないようだ。だが、考え方によってはこの方が「普通」或いはあるべき状態なのかもしれない。とはいえ多くの来館者の反応を単純にまとめみると、自分達の知っている美術との表面的な違いに出鼻を挫かれたような気持ちになり、「わがが分からない」「親しみにくい」という以上の感想を持って、「高尚なもので自分達とは関係ない」ということで自分の気持ちと折り合いをつけようとしているのが実状のようである。(現代美術は初めてという人から、感心するような自由で斬新な解釈や感想を聞くことも多いのだが)

「アートは楽しい」には上述の状況に対応し、より多くの人に現代美術に興味と親近感を持ってほしいという意図がある。しかしそれはいわゆる「分かりやすい」(一般の来館者の先入観に近い)作品を展示することであれば、一種啓蒙的に「理解」している者がしていない者に教え、或いは同好会的に自分達と共感できる人を増やし、結果自分達の社会的なありようを無批判に肯定しようというものでもない。

美術、特に現代美術が多くなる人から難解といわれ、自分とは関係のない高尚なものとして敬遠される理由は何か。種々の原因が複雑に絡み合っていることは確かだが、中でも次の2点が問題ではないだろうか。

一、学校教育や美術館の在り方などを含めた様々な問題により強固に植え付けられた、「美術=写実」「美術=表面的に綺麗なもの」「美術=高尚・高級」といった先入観が心の壁になり、見る側が勝手に美術を難しくしてしまっていること。³²

一、黙って有り難く見る、というような権威的に「上」から押し付けられた美術体験或いは押し付けられているという感覚が疎外感を生じさせ、美術に対して自発的に「自分達の身近な楽しみ」という感覚を持ってないこと。³³

とすれば何も美術史を辿ったり写実的な作品ばかりを集めたりしなくても、見る側の「心の壁」を乗り越えて注意や興味を惹きつける何等かの要素を持った作品であれば、その新旧や写実

性の如何にかかわらず楽しむことができると考えられる。また親近感という点では、あまり「美術然」とした作品や会ったことのない「昔の偉い人」の作品より、鑑賞者と同じ時代を生き、生身の人間として実感できる現代の若い作家の作品の方が本当は適しているとも考えられる。つまり「アートは楽しい」では教育普及と美術の現況の紹介を関連付け、多くの人々が今美術に起きていることに関心を持ち、究極的には作家や美術館の活動が社会に開かれたものになることを目指しているといえる。

今回の「アートは楽しい」では「天国で地獄」というテーマ(タイトル)で企画を進めた。しかしこのテーマは新しい特定の傾向の作家を集めて名前を付けたものではないし、しっかりとした求心的なコンセプトとも違う。むしろ個々の作家・作品に近付くための手掛りのようなもので、必ずしも作品の特徴的かつ本質的な要素を言い表わそうとしたものではない。したがってタイトルとしては奇異かもしれないが、以下に説明するように意外と普遍的なテーマとなっている。

「天国で地獄」とは天国であると同時に地獄でもあるという意味で、作品から二つの相反する要素が同時に感じられる状況を目指す。一方は心地よさ・美しさ・ユートピア・安心感・かわいらしさといった表面的にプラスの価値(天国)を持ち、他方は恐怖・不安・異様さ・警告・不可解といったマイナスの価値(地獄)を持つように見える。しかし天国=善、地獄=悪という単純な二分法ではなく、むしろ日常的な価値観が混乱するような状況である。また、現代における美術のあり方として、表面的な格好良さやかわいらしさ、ファッション性など(天国)のみが受け入れられ、自己満足や流行として安易に消費されていく状況に対する抵抗(地獄)を表すという意味もある。一方現実目を見れば、現代社会はまさに「天国で地獄」といえる状況ではないか。また、人間の心の中も相反する価値が同居し攻め合っている一種の「天国で地獄」(笑題に倣って「天使で悪魔」というべきか?)ではある。美術が時代を反映し、また多少とも人間的なものであるなら、潜在的にはほとんどの現代美術の作品がこのテーマに当てはまるのかも知れない。

テーマとの関係において奈良美智の作品はある意味分かりやすいと思われる。奈良の作品にはこちらを覗んでいるような子供がよく描かれるが、一見分かりやすい「子供の青」を含めて我々が理解し同化したつもりになったとき、なおその子供はこちらを覗み返している。そんな気がしてならない。奈良は作家活動においても作品集(今回出品の平面も絵本の原画である)や絵

入りの腕時計など気軽に手にいれやすいものに取り組み一方、あくまでイラストやキャラクターではない、「絵画」としての質にこだわって制作している。

杉戸洋は奈良の勤めで絵を描き始めたというが、また独特の味のある作家である。多くは一種の風景画になっていて、夢で見たものなどをモチーフにしているという。軽い浮遊感のある静かな画面は一抹の不安のようなものをふと感じさせるときがあり、その意味では、作品は大きく異なるが森田多恵と共通するものがあるように思われる。時折作品に描き込まれるカーテンは、絵画の中の異世界を絵の外の現実から区切るものなのだろうか。

大岩オスカール幸男も平面作家であるが、前述の二人とは対照的な作風である（大岩自身のペインティングの中でも作風に多様性がある）。時として説明的なまでにアイロニー、寓意、批判精神が盛り込まれているにぎやかな大画面には、しかし人物が描かれていることはまずない。作家を出身地に安易に結び付けることは禁物だが、日系ブラジル人である大岩の作品からは、日本人の若い作家には見られない独特のエネルギーが感じられる。

近年ジェンダーを扱った作品や展覧会が多くなっているが、小泉雅代は15年以上前から日本の伝統的な女性のあり方について考えさせるような作品を発表してきた作家である。作品は外面的な観察・批評よりも作家の実体験と内面の探求に基づいているようであり、それだけにその強烈な表現は見るものを圧倒する。近年作品は少し変化し、以前より穏やかで他者がその世界に入り込みやすくなったように感じられる。今回は旧作と新作が向かい合って展示される予定である。

牛島達治は機械を使った作品で知られるが、機械の持つ美しさや仕組みに対する興味だけで機械を使っているわけではない。人が機械に魅かれるのは、その一見非人間的なところがかえって人間臭さを感じさせるからだといわれるが、今回室内で展示される作品では明らかに人間の比喩として機械が使われる。自ら目の回るような映像を流しつつ人を探して回転し、ある瞬間一斉に静止するモニターと車輪は、人間のどのような面を表しているのか考えさせる作品である。

笠原出は笑顔顔をモチーフにした作品で知られている作家である。笑顔は単純に考えると良いものであり、本人も笑顔は社会の潤滑油のようなものと言っているが、同時に笑いという感情は相手の感情に同調しないものであり、自分の感情も隠すことができる。笠原の目のない口だけの笑顔や眠っている人の上に現れる笑顔をみて軽い恐怖を感じるのは、真の感情が隠されて

いるようで分らないという感覚に由来するのかもしれない。

ところで、作品から二つの相反する要素が同時に感じられるとき、まれにその不安定さからか、夢（悪夢）の中かいは現実が異世界化したような不思議な感覚を感じることがある。前述の杉戸洋もそうであるが、市川平と森田多恵は作品を見たとき二面性よりむしろそのような異世界感が強く感じられる作家である。

市川は機械や電気を使いながらノスタルジーやファンタジーをも感じさせる作品を発表している。今回の出品作品は今年の12月24日に直立するクリスマスツリーという設定で97年よりバージョンアップしてきている。99年のクリスマスというところに、作者が子供の頃に流行したノストラダムスの予言（1999年夏に人類は壊滅的な打撃を受ける）を、まさかと思いつきながら完全には否定し切れない作家の（或いは鑑賞者の）微妙な心理が現われている。

森田は本来視覚の意味やあり方を問う作家の系譜に属するのかもしれない。しかし作品からは自己言及性よりも外国のおとぎ話の世界を覗いているような不思議な（シュールなというか）非現実感をより強く感じる。静謐できれいだけれども、どんなに歩いても同じところから抜け出せない悪夢のような怖さ、それは箱の中という完結し閉ざされた世界を覗くという形態によって強化されているようだ。

ここまで一応テーマに沿うような形で各作家の説明めいたものを書いてきた。しかし前述のようにテーマは作品にアプローチする一つの方法に過ぎず、個々の作家を一つにまとめ上げるものではない。むしろ本展の特徴は多様性にあり、あたりまえのことではあるが、一人一人の作家、一つ一つの作品とじっくり向き合う、この基本的な鑑賞態度に絶えず立ち返ることが展覧会を楽しむ最良の方法なのである。各作家の個性的で豊かな表現に触れることにし、多くの人々が美術に興味をもち、自分たちの身近な楽しみとして現代美術に親しんで下さることを私たちは願ってやみません。

(注1) 便宜上ここでは「教育施設」という言葉を使っているが、よく指摘されるように「上から下に教え広めて行く」感じがあって必ずしも適切ではない。

(注2) その根拠は、「分かる」ことに対する盲目的な信頼のようなものがあると思われる。

(注3) 別展は子供の誘引先や親から「上手く描く」「そっくりに描く」ことを求められたため、「自分だけが下手だから」笑いは分からない（美術館に行きたくない）という人は結構多い。